

2023年度 文教大学生生活科学研究所

## 公開講座記録

開催日時 2024年2月17日(土) 13:30-16:30

会場 文教大学越谷キャンパス 14号館 14101+Zoom ウェビナー

開会の挨拶	研究所所長	金藤 ふゆ子
司会進行	研究所研修部主任	鎌田 晶子
コーディネーター	研究所研修部主任	大塚 明子

## 〈テーマ〉

## 「埼玉県における多文化共生の現場と課題」

## ◆企画趣旨

近年の日本社会においても、「多文化共生の実現」という目標がますます高く掲げられ、各種講座などで実践報告も積み重ねられている。そこで本公開講座では、テーマをもう少し具体化し、この極めて抽象的な理念が顕在的・潜在的に内包しうる、様々なコンフリクトに焦点を当てる。

顕在的なコンフリクトとしては、現実的な人員や時間の配分において他の項目と競合する場合、「総論賛成・各論反対」の対応が取られがちとなる。教員は様々な業務をかかえて多忙であり、外国からきたこどもの対応に時間をさくことが難しい場合がある。

また日本ではまだ顕著に現れていないと思われるが、海外にルーツを持つ子どもや家族が馴染んでいる文化および当事者が要請する「多文化共生」が、公教育におけるLGBTQ+などの多様性の個人の自由の追求とぶつかる場合がありうる。

生活科学研究所は社会福祉学、教育学など学際的な分野から学究を行う研究所として、多角的に考察を行うことが可能であるという強みを生かしてこの問題について考察を行いたい。本講座によって、多文化共生の現場と課題について考察を深め、市民の皆様との共有を進めていくことが目的である。

この目的のため、以下の各氏にそれぞれの視点からの報告をお願いした(発表順、敬称略)。

1. 孫美幸：文教大学国際学部准教授。専門は教育学で、「多文化共生と社会」「多文化交流特論」など担当。日本の教育現場が多文化共生教育に関して抱える問題性や可能性について話していただく。

2. 山崎慎也：埼玉県教育局市町村支援部義務教育課、学びの支援担当、指導主事。行政の現場から、埼玉県の多文化共生教育、特に日本語教育の現状と課題について話していただく。

3. 焦揚：文教大学大学院言語文化研究科修士1年。小学生の時に中国から来日し、以降大学まで日本で教育を受けた。多文化共生教育の支援対象となる立場から、自身の経験と感じた課題に

ついて話していただく。

4. 森恭子：日本女子大学人間社会学部教授。専門は福祉学で、日本ソーシャルワーカー連盟国際委員・日本社会福祉士会多文化ソーシャルワークプロジェクトチーム委員を務める。埼玉県春日部市で外国人の子どもの学習支援教室を運営する立場から、福祉と教育の連携について話していただく。

#### ◆プログラム

まず4名の登壇者に、それぞれ約15分で報告をしていただいた。以下に、ごく簡単ではあるが要旨を紹介する。

##### 1 孫美幸「多文化共生社会と教育を考える」

外国にルーツをもつ子どもたちが経験しがちなマイクロアグレッションや、2世・3世の子どもが1世のケアラーになりがちなことなど現状や様々な問題点を紹介。そのうえで、文化を境界が閉じたものとして扱う「文化本質主義」や単一基準のアイデンティティによって人間を矮小化する危険性を踏まえ、歴史の複数性という視点や、オルタナティブな学びの場の構築、そしてホリスティックな学びやケアの必要性を主張された。

##### 2 山崎慎也「埼玉県における日本語指導の現状と課題」

埼玉県における帰国・外国人児童生徒の現状について幅広くデータを外観。その中で浮かび上がっている課題を「受け入れ態勢の充実」「日本語指導を担当する教員の専門性の向上」「集住地域と散在地域における支援体制の構築」の3点に整理し、それぞれの進展状況について詳しくご紹介いただいた。

##### 3 焦揚「2000年代の在日生活」

2000年代に小学生として初来日した経験を踏まえ、まだ支援体制が十分でない状況下で感じた困難について語っていただいた。外国にルーツをもつ子どもたちへの日本語や学習への支援の必要性を述べる一方で、修士論文のテーマとして構想している「母語の維持」の重要性についても主張された。

##### 4 森恭子「海外につながりをもつ子ども・家族への支援～福祉・ソーシャルワークの視点から～」

春日部市における外国人の子どもの学習支援教室「たけのこ」での活動を通して見えてきた課題として、「学校での日本語学習状況がわかりにくい」「障害をもっている子どもへの対応」「途中で来なくなる子どもや高校進学後のフォロー」などに具体化し、全てに通底する教育と福祉の連携の必要性について訴えた。また今後の展望へのヒントとして、スウェーデンの事例に関する自身の調査も紹介された。

##### 5 シンポジウム

報告後、まず4名の登壇者に他の報告について短いコメントをいただいた。その後、短い休憩時間に、対面及びオンラインの参加者から質問を募集。再び4名にパネリストとして登壇いただき、コーディネーターの大塚が進行を務め、フロアとの活発な質疑応答が行われた。